

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目

メタファーに関する哲学的・認知言語学的
考察

氏名

香春

論文内容の要旨

本論文の目的は、アリストテレスから現代哲学、および認知言語学のメタファー理論を検討し、メタファーという言語現象には、どのような思考様式と認知メカニズムがかかわっているかを解明することにある。

メタファーは、哲学、言語学、修辞学、心理学、美学などの学問にわたる事柄として研究されてきた。古代から現代に至るまで、メタファー研究は長い歴史を持ち、さまざまな理論が展開されてきた。それは、古代ギリシアの哲学者アリストテレスに始まったが、彼の偉大な研究は後世の学者達に誤った形で解釈され、彼の意図に反した形で、伝承されてきた。それが、哲学者マーク・ジョンソンと認知言語学者ジョージ・レイコフらの試み、つまり「思考過程を支配する認知メカニズム」としてメタファーを捉える理論が誕生することによって、言語現象にとって根本的な働きとしてメタファーが捉えられるようになる。私の見解では、彼らの理論はアリストテレスのメタファー理論を、〈身体性〉と〈構造化〉の側面から再構築したと言ってもよい。さらには、我々の言語と思考は、メンタル・スペース間に張り巡らされたマッピングのネットワークを操作する能力に依存するという、フォコニエのメンタル・スペース理論が提唱されるにいた。それによると、メタファーは、「投射マッピング」として解釈され、異なるメンタル・スペース間の知識構造を結びつける重要な認知マッピングであり、概念融合といった重要な認知プロセスを引き起こす。すなわち、メタファーに見られる投射マッピングは「概念を構築する」重要な認知プロセスであることが解明された。本論文は、上記のメタファー研究の諸段階を哲学の立場から綿密に検討することにより、メタファーの本質を捉えようとした試みである。以下は各章の要点である。

第1章

・アリストテレスのメタファーの定義

本論文では、アリストテレスのメタファーの定義は本義でのメタファー研究の始まりというように考えて来た。アリストテレスは、メタファーの定義について、主に四つの型を提案している。その中で、「種と類の関係に基づくカテゴリーの移動」として考えられる三つの型と、最後の型は「類比関係 (analogy)」による思考様式の転換として考えられる。そして、直喩は、アリストテレスでは「類比関係 (analogy)」に基づくメタファーの一種、つまり、「機能否定式修飾方法」として定義される。つまり、直喩とは「類比関係に基づくメタファーの一つの型」である。

要するに、アリストテレスのメタファーの定義を詳しく分類すると次のようになる。「類から種への転用」、「種から類への転用」、「類を同じくする種から種への転用」、「類比関係による肯定集積的交換法」と「類比関係による機能否定式修飾方法」の五つになる。

アリストテレスが定義したメタファーは、所謂、修辞学で言う「単なる言葉の綾」ではなく、修辞的文彩一般を指す広義のメタファーであることを示した。アリストテレスのメタファーの定義の意義は「名称の転用」ではなく、「名称の転用」が行われる原理を理解することにある。つまり、アリストテレスのメタファーの定義は、「種と類の関係に基づくカテゴリーの移動」を表す故に、基本的思考様式をも表す。

・リチャーズのメタファー論

リチャーズは、アリストテレスのメタファーに関する偉大な発見を復活させようと努め、

文脈に支えられた意味論の原理を唱えた。そのような意味論の原理をメタファーに用い、新しい修辞学理論を構築しようとした。リチャーズによれば、意味とは、人間が作った抽象的で、非現実的なものであるという。そして、如何なる語も、文脈が変わることによって、その意味も変わると考えた。

メタファーに関しては、彼は、メタファーの二つの部分、つまり「主意」と「媒体」が一体となることが重要であり、その二つは分けられない。それは、メタファーであることを見分ける基準となる。言い換えれば、メタファーには、必ず二つの思想が共に与えられる必要がある。そして、メタファーにおいては、これら、主意と媒体とは互いに影響し合い、最終的に、どちらにも帰属しえないような、新しい意味構造を作ることが明かされた。

・ブラック

ブラックは、リチャーズの文脈の原理を生かしたものの、論理的文法の立場から見直した。文脈が変わるにつれて、その文を構成する語の意味が変わり得るというリチャーズの考えと違って、ブラックはある文の中で一つの語がメタファー的に用いられることによって、その文全体の意味が変わると考えた。しかし、この見解に関しては、文の中で、ある語が字義的な意味で用いられ、ある語がメタファー的な意味で用いられていることを、いかに知ることができるのかという問題が生じる。このような疑問が生じるものの、ブラックがメタファー研究にもたらした貢献は少なくはない。「相互作用説」は、メタファー研究の歴史の中で、いくつかの重要な点を提案した。メタファーは修辞学で言うように、言葉の修飾、もしくは言葉の文彩ではなく、メタファーには、メタファーでしか語れないような力（認識の力）と効果があると主張した。また、すでに存在している類似性を強調するというより、新たな類似性を作るといった、創造的な面があることを強調した。また、さらに、哲学においては、このように、相互作用を引き起こす創造的メタファーが重要であることを示した。

・サール

サールは、メタファーとしての発話においては、各表現はその意味を変えないからこそ、メタファーとしての発話が成立すると考えた。また、メタファーとしての発話の意味は、話し手によって作られたものである。メタファーとしての発話意味は、文字通りの意味とは異なるが、しかし文字通りの意味を通してのみ、その意味が聞き手に伝わっていく。また、メタファーによる断言は必ずしも類似性についての断言である必要はない。類似性は、あくまでもメタファーの産出と理解にかかわるものであり、意味に関わるのではない。その際、サールは、メタファーとしての発話には、決定されるべき真理条件が存在し、その意味理解に関しては、聞き手はサールの言う8つの原理に基づいて行われると考えた。

また、サールは、メタファーは、文字通りの表現に言い換えることができないと考えた。なぜならば、聞き手の了解の中で生じる意味論的内容は、メタファーとしての発話を用いないと再生することができないからである。

第5章では、レイコフとジョンソンによる概念的メタファー

哲学者で認知言語学者であるレイコフとジョンソン、及び、レイコフとターナーらの著作に従って、「概念的メタファー」について考察した。概念的メタファー理論はメタファー理論の最新の研究であり、故に、アリストテレスのメタファーの定義と共通する部分は多く見られることが明らかとなった。

- (1) メタファーとは本質的に概念上の問題である。
- (2) 我々の思考過程をコントロールし、概念体系の一部を成している。
- (3) あらゆる概念は、メタファー的側面と非メタファー的側面を潜在する。
- (4) 我々はある概念に対して、メタファー的である、あるいは、非メタファー的であると簡単に決着付けることができない。
- (5) メタファーとは我々の学習能力によって習得され得るものであり、慣習化された知識として、知識貯蔵庫に保存される。
- (6) 我々の概念体系にメタファーがあるからこそ、言語表現としてのメタファーが可能となる。
- (7) メタファー的概念は文字通りの言葉の中で反映され、文字通りの言葉の一部を成すため、メタファーと気づかれないことがほとんどである。
- (8) メタファーとは語彙的な意味変化のことではない。
- (9) 文化をそのまま、生々しく表現することができる、最も適切な手段である。

第6章では、マーク・ジョンソンの「イメージ図式」論によるメタファー論を検討した。「イメージ図式」とは、我々が世界と関わり合う身体経験から生じる＜動的パターン＞である。要する、自己と他者の相互作用と、自己と外界の相互作用から生じる知覚パターンであり、身体性を考慮に入れると行動のパターンでもある。ジョンソンの「イメージ図式」

はカントの図式理論から由来するものの、身体経験に基づいて捉え直されたゆえに、ゲシュタルト的特徴を備えるなどの特徴を持つ概念となっている。ジョンソンは、「図式」の「身体性」について、特に強調した。メタファー論におけるジョンソンの貢献は、我々が身体をもって外界と接する中、我々の身体は非常に重要な役割を果たしていることを強調した点にある。

我々は何事をしようと、我々は常に他者や様々な外的要因から影響を受けている。その中で、我々の行動は一定の規則、或いは、秩序に従って実行される。その意味で我々の経験は首尾一貫した体系として理解されうる。いわば、我々が行う様々な活動はある一定の秩序を成しており、パターン化されている、と言える。今度は、そのような行動パターンは様々な異なる活動を結びつける媒介として機能する。

他方、そのようなく動的パターン>は異なる認知領域を横断することができる。それは<メタファー的投射>としても機能することができるということの意味する。そして、<メタファー的投射>は、このように「イメージ図式」を身体的な経験的基底として持つことによって、二つの経験領域を原初的に結びつける手段として機能することができるのである。

第7章では、フォコニエのメンタル・スペース理論を背景にメタファーを分析した。フォコニエのいうメンタル・スペースとは、意味構造と概念構築にとって不可欠な認知構築であり、言語表現とそれと関連する現実世界、いわば、経験世界がどのように連結しているかを明示的に提示する際に有効な概念装置となる。メンタル・スペース理論はある一つの分野においてではなく、文法構造や意味構造、そして概念構造の全てにおける認知的機構を究明するものである。フォコニエによれば、局所的談話においては、スペースの構築が行われ、情報が異なる領域に於いて関係づけられ、分割される。そして、異なる領域において、分割された情報を再び結合することで、現実世界における出来事に関する適切な背景知識が獲得されるという。さらに、フォコニエは、<二つの異なる概念領域の間の投射マッピングによってその意味内容が決定される認知プロセス>としてメタファーを捉え、そうすることでメタファーを、多領域を持つ認知プロセスとして見直した。具体的には、概念メタファーで見た、「ソース領域」と「ターゲット領域」の上に「総称スペース」と「融合スペース」を付け加えることによって、概念構築及び意味構成において、重要な認知作業が行われていることを見せてくれた。フォコニエによる、メンタル・スペース理論における指示構造の研究は、意味構造の解釈、文法構造の解釈、及び、概念構築の解釈などの様々な分野において通用するものであり、したがって、認知言語学者レイコフはフォコニエの認知的アプローチから定義した「メンタル・スペース」を重要な認知モデルの一つとして扱った。なぜならば、認知モデル理論はメンタル・スペースに構造を与えるからである。このように構造化された局所的精神領域（メンタル・スペース）は概念化及び思考の媒体として、非常に豊かな認知構築のプロセスを提示してくれていることがわかった。第八章では、アナロジーと類似性の概念はメタファーという認知プロセスとどのように関わるかについて確認した。アリストテレスのメタファーの定義は後世の修辞学者達に誤った形で伝承されて来たと考えられる。そして、アナロジーと類似性について次のように結論つけた。アナロジーとは一種の抽象的な思考であり、ゆえに、感覚的経験の領域を超えた、様々なモデル、たとえば、科学モデル、認知モデルを作るための心の働きである。アナロジーは様々な科学的発見に用いられる有力な科学モデルであり、感覚から得ることのできる情報以上のものを理解することができる。また、アナロジーとは、表面的には異なる状況間に、同じ抽象的なパターンを見つけ出す心の働きである。さらに、ゲントナーらの研究では、伝統的なアナロジー、所謂、類比関係<A:B=C:D>とは、単なる比較ということではなく、構造マッピングといった認知操作が行われていることが分かった。いわば、アリストテレスが、メタファーの定義に、四つの型の一つには類比関係を提案した。言い換えれば、類比関係とは、単なる客観的属性の比較ではない、ということが明らかとなった。従って、メタファーとは、単なる二つの対象の属性的特徴の比較ではない。

従って、メタファーの比較説では、メタファーの動機づけとして見立てて来た「類似性」はメタファーの動機づけにはならない、ということが明らかとなった。なぜならば、類似性は、同じカテゴリーに属する異なるものことや事柄の間に<共有される感覚的特徴の度合いの幅>を表すものであるからである。それは、あくまでも、<度合いの幅>を示す概念であり、尺度を示すことができない。

ところが、類似性は、メタファーの動機づけにはならないが、カテゴリーの内部構造の一つとして機能する。